

もわからず、不安の毎日でした。千円貰った小遣い錢も監禁同様の中では使い果たしてしまします。幸いなことにいつまでかわからないと思った監禁生活も一週間くらいで解けて、昭和十八年以来久しぶりに懐かしい故郷に多くの人の出迎えを受けて立ったのは、それから数日後でした。

寒さと重労働の抑留生活を

前にして

熊本県 家入 壮介

列車は北へ北へと大雪原の中を進んで行く。見渡す限りの雪原の中を列車は人間社会から遠ざかっていくように感じられた。牡丹江を發ってから三日目であらうか、列車は小さな駅に停車して、全員下車せよとのコンボーイ（警戒兵）の指示で荷物をまとめて降りる。外は雪が二十センチ余積もっており、あたりは鉛色のもやがかかったようで、しばらく立っていると内側に

毛皮のついた軍隊の防寒靴を通して足に針を刺すような痛みを感じた。今までに経験したことのないような寒さである。雪の中既に多くの人に踏み固められた道を十分位歩くと大きな倉庫に着いた。裏の方に無線塔があり、農業機械倉庫の跡らしく、付近にトラクターの部品らしきものが残っていた。場所はどのあたりか全く見当もつかなかったが、だいたい後になってコムソモリスクの近くの駅であることがわかった。

思えば国境の町綏芬河からウスリースクまで約百キロ、ウスリースクからシベリア鉄道を北上してハバロフスクまで約百キロ、さらに二百キロ北上してコムソモリスクに至る。約千キロを北上したことになる。ここはドーフと呼ばれていた。場所割りをして大倉庫に入る。数百名は入る広さで今夜はここで宿泊することになり、早速雪を溶かし、薪を集め、残り少なくなった米を靴下の袋から出して飯盒炊さんにかかる。思い思いの夕食を済ませる頃には日暮れとなり、電気のない大部屋は暗く寒く、人々は疲れ果てて言葉少なに土間の上に身体を横たえた。帰国の望みを完全に絶たれ、

今後の見通しもわからない。ハルビンから持ってきた食糧も底をつき始め、不安と絶望に打ちのめされていた。そんな時大きな部屋の向こうの隅から演芸会が始まった様子で、浪花節の語り声が聞こえてきた。身体

を起こして耳を傾けたが、広いのでなかなか聞き取れない。次の漫談（横山昌良さん）もわからないまま終わった。間もなくほのかな明かりの中から透き通るようなハーモニカの響きが聞こえてきた。美しい音色にのって「誰か故郷を想わざる」「荒城の月」「影を慕いて」と演奏が続くと、懐かしい故郷が思い出され、身を乗り出して聞き入り、去りし日の感傷に胸を傷めた。感嘆のざわめきの中に今度は声楽が聞こえてきた。イタリヤ民謡「オオソレミヨ」の独唱である。これはまた素晴らしい声量で我々の飢えた心の中にさらに大きな感動を与えた。忘れ去った青春の思い出が次々と蘇り、大部屋の中はしばらくうっとりとして聞きはれていた。終わって万雷の拍手の中、よく見ると高橋鶴雄の熱唱であった。かくしてシベリア第一夜は、雪に包まれたドーフの大部屋で不安と寒さにふるえながらも、高橋

の独唱と深掘さんのハーモニカに慰められながら終生忘れることのできない思い出深い一夜となった。

朝からトラックが数台来て人員輸送が始まった。銃剣を持つコンボイに「ダバイダバイ」とせき立てられながら二、三十名ずつ乗り込み次々と出発して行った。人員輸送は昨日から続けられていたらしく、大部屋の人員も次第に少なくなってきた。我々は第三中隊で、小隊長は誰であったかわからなかった。午後になって順番がきてトラックに乗り込むと、厚い天幕の覆いをかけられて出発した。道路が悪いらしくガタガタと大きく揺れながら奥へ奥へと進んで行った。森閑とした密林の中を走っている気配である。何時間か走ってトラックが止まると、外でロシア語の話し声が聞こえる。トラックを降りてみるとすでに薄暗く、幾棟かの丸太小屋が並んで周囲は高い木柵で囲まれている。寒さが一段と身にしむ。

ソ連将校の指示で我々は門より二つ目の丸太小屋に入る。中は中央に四角いペーチカがあり、それを取り囲んで二段ベッドが四方に造られていた。長い間空き

家であつたらしく、丸太の壁は隙間だらけでガタガタの扉から吹き込む風は肌を刺すようである。電気もランプもなく、真つ暗い部屋に薪を燃やすペーチカの光がチラチラと揺れ、言いしれぬわびしい夜であつた。毛布も藁布団もないので、板の上に着のまま背囊枕に横になると、小雪まじりの隙間風が顔に吹き付ける。タオルを首に巻き防寒帽で頭を包んで寝ると、疲れが一度に出ていつの間にか眠ってしまった。

この日からシベリア抑留生活が始まつた。地球の何処にいてもわからない。ただ寒さと重労働の毎日が続くことになり、時間は日の出と日没のみを刻み、月日は止まったままでわからない。年単位で時が経ち文字通り氷の中に閉じ込められた。この収容所（ハバロフスク州ホルモリー地区第二一七収容所）は、第二次大戦前第二シベリア鉄道（バム鉄道）建設のため造られた囚人収容所の跡である。

私の抑留生活

北海道 道下 徹男

テルマニ〇一収容所では農園作業と伐採作業、二か月ほど過ぎたある日、収容所から一人の逃亡者が出た。要注意隊としてすぐに隊は他の土地に移動させられた。宿舎もない、我々は木を伐採し丸太で宿舎を建てた。農園作業は野菜の収穫、伐採作業は直径一メートル位の松の太木を切り倒し、宿舎までの運搬である。我が第三小隊の作業成績は、他の工兵以外の小隊と比べものにならないほど抜群で、ソ連の収容所長から見込まれ、食事も全員最高の百二十五%のノルマのパンを与えられた。これが悪かったのです。その後、鉄道路盤の建設作業、屋外の電柱建て等、困難な仕事は全て我が第三小隊に命令された。ある時は、路盤建設作業から帰ったばかりの我が隊に、収容所長が宿舎に駆け付けてきて「収容所の前に汽車が入って他の隊が貨車か